

第56回試験研究成果発表会（果樹Ⅰ）発表概要

【日時】平成31年1月24日（木）13:00～15:50

【会場】農林総合研究センター 農本館（千葉市緑区大膳野町 808）

発表1 成果発表（13:10～13:35）

ナシのノミを用いた簡易腹接ぎ方法

－若木のうちに側枝を適切に確保しよう－

果樹研究室 平井 達也

ノミを用いた腹接ぎは、一般的な腹接ぎ方法である”剥ぎ接ぎ”より簡易で、かつ比較的細い主枝や側枝基部にも行うことができるので、特に若木における早期の側枝確保に適していますが、活着率が低いことが現場では課題となっています。今回はノミを用いた接ぎ木の基本的な方法と、活着率を高めるためのコツについて紹介します。



ノミを用いた腹接ぎ

発表2 情報提供（13:35～13:55）

ナシ栽培における生物的防除

－天敵を活用するための下草管理－

病理昆虫研究室 福田 寛

ナシ栽培で問題になるハダニ類対策のため、土着天敵類を圃場内で温存し、樹上に誘導することによって生物的防除に活用する実証試験を行いました。その結果、減農薬栽培と草生栽培を組み合わせることにより、カブリダニ類をはじめとする天敵類の圃場での個体数が増加し、ナシ樹上のハダニ類の多発生が抑制されることが明らかとなりました。



天敵を活用した下草管理

発表3 成果発表（13:55～14:20）

樹園地土壌の現状と施肥管理の実態

－現在の課題と今後の圃場管理について－

土壌環境研究室 松本 崇志

平成 25～28 年度で県内の樹園地 18 地点の土壌調査を行い、過去の調査結果との比較から、農耕地土壌の実態と変化を明らかにしました。作土層の深さの平均値は 12cm であり、過去の調査（平成 6～10 年度）と比べ、浅くなっていました。化学性の平均値は、交換性陽イオン、可給態リン酸で過剰でした。化学肥料施肥量は減少していましたが、堆肥施用量はほとんど変化していなかったため、土壌成分を意識した施肥管理を進めるべきです。



上：穴掘りの様子 下：土壌断面

発表4 情報提供（14:35～14:55）

低コストで実施できる！

低濃度エタノールを用いたナシ白紋羽病発病跡地の土壌還元消毒法－その効果と注意点－

生物工学研究室 高橋 真秀

低コストで実施できるナシ白紋羽病発病跡地の消毒方法として、夏期に低濃度エタノールを用いて小面積で土壌還元消毒を行う方法を開発しました。具体的な処理方法とその消毒効果について紹介するとともに、消毒後の注意点について解説します。



土壌還元消毒の様子

発表5 成果発表 (14:55~15:20)

ニホンナシいや地現象を軽減させる効率的な客土処理方法

果樹研究室 吉田 明広

ニホンナシでは改植後にいや地現象による生育不良が発生します。新しい土壌(600L)を客土すると、新植圃場並の生育を確認していますが、生産現場では客土量の削減が望まれています。

そこで、いや地現象を低減できる客土量を調査したところ、125Lの黒ボク土を客土すると、600Lと同等の生育が確認できました。さらに、砂質土で客土の有効性を調査したところ、黒ボク土の客土が有効であることが確認されましたので、紹介します。



上：黒ボク土での客土

下：砂質土での客土

発表6 情報提供 (15:20~15:40)

マルチ処理で定植したニホンナシの苗木の初期生育を簡単に促進

果樹研究室 戸谷 智明

ニホンナシの生産者に改植を促すためには、早期に成園化するための技術支援が必要です。マルチ処理は、定植した苗木の株元を被覆することで、簡単お手軽に樹の生育を向上させる技術です。この技術の普及性を確認するため、生産者の新植圃場や改植圃場で検証したところ、樹の生育が促進されて増収することが明らかになりました。また、マルチ処理が苗木の生育を向上させる要因について明らかになりましたので併せて発表します。



マルチ処理した苗木